

# 吳越紀行



日60年1月

1985年

目次

其の八	其の七	其の六	其の五	其の四	其の三	其の二	其の一	第二章	其の二	其の一	第一章	其の二	其の一	序文
永平寺が梵鐘を寄贈	未練岳廟	三津印月	花港飯店―六和塔	靈隠寺	西冷印社	一月九日	杭州の歴史の概要	杭州	上海の歴史の概要	上海	上海	臥薪嘗胆	帝力何有於我哉	
16	14	12	11	10	9	8	8		5	5		2	1	

其の三	其の二	其の一	第五章	其の二	其の一	第四章	其の八	其の七	其の六	其の五	其の四	其の三	其の二	其の一	第三章
政治思想	民衆生活	「權威こそ創造と発展を封じ込める亡霊を」	章 雑 感	豫園	黃浦公園―南京東路	章 上 海	留園	寒山寺	植樹祭	蘇州飯店の晩餐会	拙政園	獅子林	一月十日	蘇州の歴史の概要	章 蘇 州
30	29	28		26	25		24	23	22	21	20	19	18	18	

「帝力何有於我哉」  
 日出でて働き、日入りて憩う、井をほりて飲み  
 田を耕して食う、帝力何ぞ我にあらんや。暮れ  
 「我々は日が出れば野良に出て働き、日が暮れ  
 れば帰つて寝る。水は井戸を掘つて飲めばよし、  
 食い物は田畑を耕して作ればよい。天子さまなど  
 我々にとつては、いてもいなくても、よいものだ  
 という意味である。」  
 「その仁天の如く、その知神の如し」といわれ  
 た、神話に出てくる古代中国の帝堯が、天下を治  
 めて五十年、いつたい自分の政治がうまくいつて  
 いるのか、どうか不安になり、側近の者や在野の  
 識者に尋ねてみたが、誰も知らないというので、  
 それでは粗末な服に着替えて町に出てみた。  
 ある街角で、帝は子供たちが自分をついて行くと  
 歌を唱つているのを聞いた。さらに歩いて行くと  
 一人の老人が何かを食べながら、満腹となつて腹  
 をぼんぼんとたき、遊びに興じて高らかに唱つ  
 ていた歌が、右にかかけた歌であつた。  
 「帝はこれを聞くと、うむ、これでよし」とうな  
 ずいた。これをその彼の考へていた「無為の政治」  
 の極致を唱つたものだ。つたからである。天下大平  
 それから「鼓腹撃壤」という言葉が、

の代名詞となつたといわれている。即ち腹一杯  
 たべられれば満足だといふ中国民衆の心が、昔  
 から民族の底流に流れていた。  
 言葉がある。「没法子」(メイフアーズ)という  
 「を表現する言葉である。これは処置なしという「あきらめ  
 二千数百年の史実のある中国では、戦争の絶  
 える暇もなく、その上に大河の氾濫や、いなご  
 等の害虫による農作物の壊滅的被害は、枚挙に  
 暇がない。このような天災や人災は、常に民衆  
 をどん底の生活におとし入れ、実に悲惨な状態  
 であつた。しかし彼等は「没法子」として甘ん  
 じてきたのである。  
 戦中戦後を通じて私は七回にわたつて訪中し  
 、特に戦中の約三年は中原の地といわれた河南  
 省を中心にして、民衆に接した体験上からみると、  
 一般大衆の心は、常に「没法子」思想であつた  
 ように思えてならない。  
 内乱や政権争奪の絶え間のない中国が、蔣介  
 石の天下になろうが、或は共産党の支配になろ  
 うが、一部の階層の者を除いた十億の民の、殆  
 んどの人達の心の底には、為政者とは何等の関  
 係がないというようであつた。

戦争がなくなつて住む家が焼かれず、貧しい衣服  
 でも寒さを防ぎ、毎日の食事にさえありつく事が  
 できれば、それで満足だという意識が、頭の中に  
 焦げついていたようであつた。四十七年前に初め  
 て中国の土を踏み、満州の各地を始めとして山西  
 省の山間僻地、或は河北・河南・山東・江蘇省の  
 文化の発展した地方、また少数民族の多い辺境の  
 地、雲南・広西の各省等を、戦中戦後を通じて幾  
 度となく歩き廻り、過去現在を眺めてきた私が、  
 今回上海・杭州・蘇州を訪れた印象は、昨今の報  
 道と同一ではないという印象の方が強い。今日の報  
 道、今次の旅行は短時日の都会地だけだつたが、薄  
 汚い雑踏の彼等の生活を直視された一行の諸賢は  
 、どのような感想を抱かれたであらうか。現代化  
 為政者は声高らかに自力更正から四つの現代化  
 へと、お題目を掲げても其れほど民衆は躍らない  
 。自由の枠をはずさず国民の口を塞いでも、彼  
 等の心底からの不満は解消されなからう。いく  
 ことは、洋の東西を問わず政治の弊害からきてい  
 る。人災の最大のものは、政治の弊害からきてい  
 る。あり、自由も競走も一党独裁は、発展を望め  
 ないことは事実だ。つまり一党独裁は、人災に陥り

易いことを考えると、我々は誠に幸福な国民だ  
 と感謝しなればならない。線が正鵠を得ているとは  
 勿論、浅学の私の視線が民族の独立と民生の安  
 決して思つてはいない。民族の新生中国が、維  
 定を待望すること久しかつた新生中国が、維  
 新後の日本が先進国に学び、国を生き甲斐とし  
 てきた例を斟酌し、偉大な進展を遂げられるこ  
 とを期待して己まない。その要諦は、堯帝のよ  
 うに、自由な民衆の心の底流を把握することに  
 尽きるのではないだろうか。序の初めに此の文を記  
 述したののである。

其二 臥薪嘗胆

「臥薪嘗胆」  
 中国は勿論のこと、我国に於ても有名な言葉  
 である。春秋時代の呉・越の国であつた蘇州・  
 杭州が、この語源の発祥の地であり、両地を訪  
 門した者は是非とも記憶を新にすべきだと考え  
 た。その由来を「序の二」に記載することにし  
 「歴史の概要」  
 中国の歴史をひもといてみると、史実的には

明かではないが、最古の王朝が「夏」という国である。続いて紀元前一六〇〇年に「殷」という王朝が、黄河の中流地域に建国した。（戦中私が馳

驅した河南省一帯）  
陝西省（河南省の西側で西安を中心にした省）にいた後進民族の「周」が、前十一世紀ごろに盛

強となり、武王の時に「殷」を滅ぼして国を建て西安を都とした。これを西周という。都を東の洛陽（河南省）に移した。これを東周という。

周王朝の勢力が弱まるにつれて、諸侯が独立して覇を競う春秋から戦国時代へと、移つて行つたのであつた。春秋戦国時代は、周の東遷（前七七〇）から秦の始皇帝の天下統一（前二二一）するまでの間をいう。

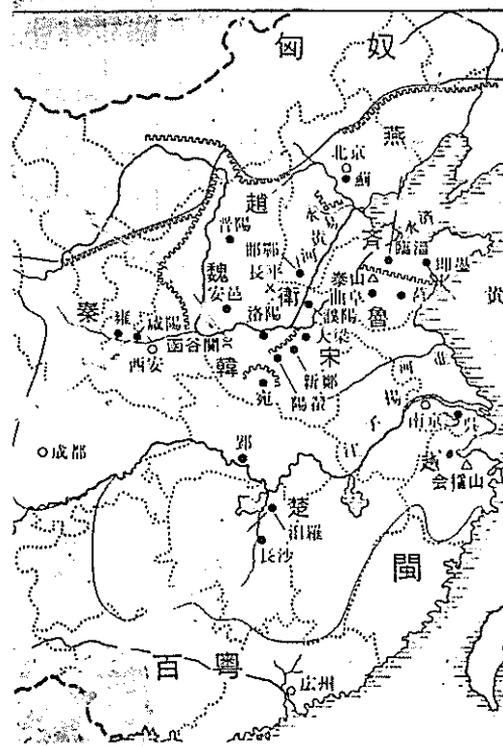
この時代には黄河流域を中心に、晋・魯・衛・鄭・曹・蔡・燕・齊・楚・陳・宋の十二の国がおり、江南地方の呉・越を加えると十四の大国が群雄割拠したのである。また弱小の国を合わせる

と一七〇〇の国があつたといわれ、各々が中原に覇権を争つたのである。

「呉・越」  
前四九七年、越王（杭州）の允常が死んで、その子の勾踐（在位前四九七〜前四六五）が即位した。

呉王（蘇州）の闔廬は其の喪に乗じて、翌年、

### 「戦国時代の群像」関係地図



越を攻めたが、逆に大敗して闔廬は負傷し、その傷がもとで死んでしまつた。  
次いで呉王となつた夫差（在位前四九六〜前四七三）は、父親を殺された恨を忘れないために、薪の上に臥ること三年に及び、戦力をたくわえて、越王勾踐を会稽山に追いつめた。（杭州の南の山）  
越王勾踐は戦いに敗けて捕えられ、呉王夫差に臣従を誓つて降伏を申し入れたのである。呉の重臣であつた伍子胥は、この機会に勾踐を殺し、越を滅ぼして後顧の憂いを絶つようと進言した。

伯、しかし呉王夫差は、わいろを貰つていた大宰の越王勾踐はそれ以来、胆を嘗めては会稽の恥を思いおこし、粗衣粗食にたえて国力の回復につとめたのである。

これを知つた呉の伍子胥は、越のことを忘れ、中原への進出に腐心する呉王夫差に、勾踐のことを警戒するようにと、しばしば進言したが、夫差はうるさがるばかりで、聞き入れなかつた。

前四八四年、齋（山東省）の内紛につけ込んで齋を攻めようとした夫差は、伯、綏のさん言を聞き入れ、口をきわめて出兵をいさめた伍子胥に剣を与えて、自害を命じたのである。

伍子胥は、「我が眼をえぐり呉（蘇州）の東門の上にかげよ。もつて越（杭州）の敵の入つて、呉を滅ぼすのを見ん」と遺言して、自らの首をはねて死んだという。

それから九年、前四七五年、呉王夫差は越王勾踐に姑蘇山（姑蘇は蘇州の昔の呼び名）に追いつめられて破れ、「伍子胥にあわせる顔がない」と自害したのである。

此の歴史から「臥薪嘗胆」という故事が生れ、仲の悪い者どうしが、同じ場所や境遇にいて、行動を共にすることを「呉越同舟」というのである。

また、敗戦の恥や、人から受けた忘れられない恥のことを「会稽の恥」といい、仇を打つことを「会稽の恥をすずぐ」というのである。

このような歴史的に由緒のある両都市を訪れたことは、誠に興味があつたばかりか、人生のよい教訓としたいものである。

記述することによつて知識を拡め、歴史を学び、民族を識り、旅情に味を添えることができると。このような目的で今回も亦、拙文を書き残すことにした。



石川 石川県造園緑化建設協会の訪中にあたり、女婿  
駒谷 康文の厚志をうけて、同行の機会を得たこと  
は、誠に名状し難い興奮であり、幸甚であつた。  
戦時中の当時では、「慟哭して肺肝は裂け、靖  
難に殉じて戦火の悲劇の中に身を曝し、戦鬪の凄  
惨と愚劣を、身命を賭して体験せし中国の地は、  
予の青春を犠牲にせし修羅場にして、幾何の紙幅  
を費すも、胸宇を表現すること不可能なり」とい  
うように、書いたかもしれない。  
「物換わり星移つて幾秋をか度る」。あの時代  
から総ての物が変化して時間が経過し、幾回とな  
く秋（年）が過ぎたが、今回親子相携えての訪中  
は、千載一遇の好機であつて、若者のように欣喜  
雀躍したのであつた。

其の一 上海の歴史の概要

上海は宋代末の一二六七年に貿易港となり、十  
八世紀初めには日本との貿易も行なわれていた。  
しかし上海が歴史の舞台に登場したのは、十九世  
紀半ばからである。  
一八四二年、イギリスとのアヘン戦争に敗れた  
清朝は、南京条約によつて通商港として上海を開  
港した。以後、西陲列国は争つて租界を設置し、

一八九四年の日清戦争後には、二八カ所の租  
界が置かれた。  
一九三一年九月の柳条溝事件（満州事変）、  
一九三七年七月の蘆溝橋事件（日支事変）の戦  
火は上海に飛び火して、金沢第九師団は此の地  
に駒を進めたのであつた。  
一九四五年八月、第二次大戦は終りを告げた  
が、蒋介石の国民党軍と共産党軍との内乱が続  
き、一九四九年五月二十八日に人民解放軍によ  
つて解放されたのである。  
現在は戦前の軽工業から重工業に重点を移し  
、北京・天津と共に中央直轄の特別市となつて  
人口一、一八〇万の世界最大都市に発展してい  
る。

其の二 出発く上海

一月八日 曇

満席のバスは白一色の北陸路を南下して、午  
前十一時、大阪国際空港に到着。降雪を予想し  
て一時間の繰上げの出発に変更したが、幸いに  
天候は回復して、鹿島立ちは上々であつた。  
一四・三五、中国民航九二二便は定刻に俗塵  
の世界を蹴つて、銀翼は上昇を続けた。淡路島  
を過ぎ、次々と網膜にうつる瀬戸内の小島は、  
浮島のように銀色にもえて、空は碧、浩浩とし



た空間は解脫の聖地のようだ。本土を離れて白雲  
 渺茫の千里の世界に変わり、恍惚の境裡の中に惰眠  
 をむさぼり続けた。上海「虹橋空港」に着く。  
 一五・五〇、定時に上海「虹橋空港」に着く。  
 それにしても国際便といわれる航空機は勿論のこ  
 と、国際空港の貧弱さは国力の差を如実に象徴し  
 ているようだ。  
 中国国際旅行社上海分社の「薛滬民」氏の歓迎  
 をうけて、市の中心街へと向つたが、我が胸に去  
 来する懐しさは押えきれない。道中の家屋は旧態  
 依然として、ひなびた屋根瓦をのせ、古色蒼然と  
 した景觀は、寂しさと懐しさを混和させたのであ  
 った。  
 通訳は今夜の宿舎を上海賓館と告げ、早速地図  
 をひろげて調べたが、一流ホテルのようには場所  
 を示がない。ガイドブックを開いて街区を確認す  
 ると、烏魯木齊北路と記載してあり、勃然として  
 失望してしまつた。即ち上海の街路は黄浦公園か  
 ら南京路を中心にして、中国の中央の省や都市の  
 名称を順序よくならべ、僻地になるほど遠い場所  
 になつてゐるからだ。  
 烏魯木齊は西のはて、ソ連と国境を接した新疆  
 ウイグル自治区の都市で、天山山脈の北側のシル  
 クロードの僻地中の僻地の地名である。安西南路  
 と南京西路の交叉点を南に下る此の通りは薄暗く

黄浦公園までタクシで三十分はかかるだろう。  
 が、寒中に拘らず、ホテルのロビーに暖房がない  
 い。夕食は久しぶりに、本場の中国料理にあり  
 つける。未だかつて味つたこともないが、期待に反し  
 たりか、量もまた極めて少量、味も口に合わず、  
 上海の第一印象は最低であつた。  
 上に出発前、夜はサーカスの見学があると伝えら  
 れていたが、入場券が手に入らず之も中止にな  
 つた。サーカスとは中国語で馬賊劇と称して、私  
 も数回観覧したことがある。馬賊劇をきわめた極  
 致を是非とも一行の諸兄に供覧し、喜んでいた  
 だきたかつた。誠に残念である。  
 ち映画、それにサーカスぐらいで、入場料は日  
 本円で十五、二十円で非常に安く、大衆が押し  
 寄せるから券の入手は困難だろ。国民むけの  
 娯楽を外人観光客に提供する必要はない、と考  
 えてゐるのかも知れない。  
 一行の人は南京西路にある書画展示館に案内され、  
 持て余す人ありで、さまざまだが、通訳も国家  
 公務員で商売気たつ島とりである。日中でも三度



の寒さは肌にこたえた。先年、雲雀の長明で購入した人民帽をかぶり、防寒すがたの私は中国人に一変したようであつた。

女婿と向川さんの三人は一行と分れ、上海第一の繁華街である南京東路へと足を歩んだ。夜のために方向が判らず、対不起（トイプチ）南京東路（ナンチントンロ）在哪ル（ツアイナール）と、拙い中国語で道を尋ね、散策することになつた。

洪水のような人波の薄暗い南京東路は、車相撃ち人肩相摩すという形容の雑踏だが、電力節約の街燈は暗く、地囃も読めない位だ。それでも中国一の照明の街で、私の見た都市では、このような明るさは無い。

つれづれのまに百貨店に入り、兩人から人民帽の購入を希望されて、「帽子在哪ル可以买？」（マオツ・ツアイナール・コオイマイ）帽子はどこで買えますか、と店員に尋ねると、「対面」（トエメン）向う側と、教えてくれた。四十数年も前に覚えた中国語も、すつかり忘れてしまつたが、何とか役に立つて悦に入つた次第であつた。

反対側の帽子店で、ご兩人は好みのものを選び、早速中国人風に模様替をして黄浦公園に向つたが、初めての道程は随分長く感じ、寒さも一段と骨身にこたえてきたのである。

昔の夜の街角では、胡弓の音が聞え、何ともいえない大陸の情緒を味えたが、今では其の響きも

聞えず、物寂しいものだ。それに代つて、真黒に変色したバナナや、土色になつた「ゆで卵」を売る老人の姿は、諸民の経済の貧しさを映しているのであつた。

漸く南京東路の東端にある黄浦公園にたどり着き、ニクソン大統領も宿泊した和平飯店（旧キャセイホテル）に飛込み、タクシーを頼んで上海賓館に帰館し、旅の疲れは最善の枕といわるように、陶然とした忘機の機会を喜びながら床に就いたのであつた。

第二章 杭州

其の一 杭州の歴史の概要

中国六大古都の一つで、古来から「天に天堂（天国）あり、下に杭州・蘇州あり」といわれた美しい古都である。序文其の二に記述した春秋時代の越の都は、杭州南東六十キロの紹興であつた。隋の煬帝は江南（鎮江―杭州）をつくつて、北京に通じる大運河を完成し（六一〇）それから杭州は飛躍的發展をとげた。続いて五代時代（八九三―九七八）には呉越国（都となり、南宋王朝（一一二七―一二七九）がここに建都して「臨安」と改称した（一一三二）。その後宋が滅び元代になつてからも杭州は、政治経済文化の中心であつた。十三世紀末に杭州に遊んだイタリヤのマルコポーロの東洋見聞録に、「世界で最も美しい都市」として紹介している。十九世紀末の大平天国の乱で、大半が破壊されたといわれているが、現在は浙江省の省都として且又、中国きつての観光地として知られている。なかでも唐代の詩人・白居易（楽天）や北宋の蘇東坡の詩は有名である。

其の二 一月九日 曇

モ―ニングコールは午前四時。上海駅発六時の急行列車と早朝からの強行軍であつた。七時の急行列車も、薄もやがたち込んで視界は狭い。垣間見る田園風景は豊かな米作地帯にかかわらず、至つて貧困な情景である。日本の農業との格差が如何程か知らないが、五年前に見学した人民公社の状況と、大差がないようにしか私に網膜に映らない。現在の中国は重工業中心主義であり、工場は都会地周辺に集中している。農村も非常に豊かな地帯に報道していたが、四十数年前の姿を知る程度ではない。豊になつたと充分な説明ができる。八時三十分、杭州駅に到着。上海から一八九キロ、所要時間は二時間三十分である。零下三度の寒さは北陸と変らず、火車站（駅）は古都に相應しい仏閣型で、屋根に少々の雪が残つて秀麗古雅な感じだ。中国国際旅行社杭州分社の「范茂媛」氏が出迎え、歓迎の挨拶をした後、直ちに観光に発つた。慢慢的（ゆつくり）の中国にしては珍しいことだ。錢塘江を眺め、動物園を左に見ながら險に想像した彼の有名な西湖の湖畔に臨んだが、残念

ながら、どんよりと曇り、南画の水墨画を見るよ  
うな感じだ。(南画は南宋画のことで、山水の水  
墨画であり、北宋の北画に對してつけられた)  
清秀な湖面を眺望しながら湖の東側を半周し、  
白樂天が造つたという白堤にかかつた「断桥」  
は、半月型の風姿を現わしていた。  
清の乾隆帝の離宮があつた孤山(自然の島)に  
の渡り、中山公園を中心にした此の島が、杭州最初  
の観光となつた。

### 其三 西冷印社

「西冷印社の案内書には左記のよう記載。  
西冷印社は金石書画研究で有名な学術団体であ  
る。一九〇四年に創設を始め、一九一三年に成立  
。初代社長は近代の著名な金石画家の吳昌碩であ  
る。西冷印社は風光明媚で文物にかこまれ、ここ  
の景物はすべて大自然を利用して、工夫をこらし  
て造つたものである。柏堂・涼堂および四照閣  
は宋代に創建されたものである。三老諺字忌日  
碑を蔵してある」と。  
孤山の西端にある西冷印社は即ち、印刻と書画  
を研究する団体で、もともと浙江省(省都杭州)  
は古代から印刻の盛んな所であつた。そして折  
派という一派をなしていたのである。

入口の円形の門をくぐると、正面に由緒のあ  
る柏堂が建ち、白樂天の建立した竹閣が左側に  
見えていた。山川雨露の書室を通り抜けると、  
真前の岩石に「宗印」と彫刻されていた。はん  
この大本山らしい。宗印岩石の左に十一層の阿  
彌陀經石塔が聳え、その右後方に座つた石仏と  
が調和のとれた、いかにも莊嚴古雅な感じだ。  
更に石段を昇ると左の奥に、ひときわ目立つ  
た四坪ほどの石造の建物があり、我々の眼を引き付  
けた。之が後漢時代の(一世紀)に建造された漢  
三老石室である。この中に漢三老諺忌日碑の石  
印が内蔵されていて、この中に漢三老諺忌日碑の石  
されずに、千九百年の歴史をどめつた。古  
代中国の偉大さに驚嘆するばかりだつた。  
石室の後方台上に「吳昌碩」と書いた額を掲  
げた。清朝末期の木造建築がある。その中に彼  
の銅像が泰然と座り、詭売新聞小林社長の寄贈  
した主旨が刻まれてあつた。日中友好のために  
誠に喜ばしいことだ。  
山頂に立つ華嚴經塔を見上げながら、四照閣  
に降りた一行の人達は、宝印山房で印材や書画  
を購入するの暇がない。根強い商魂も血の交  
つた親善であるようだ。  
この印社は小規模だが、明幽の中に古代文化を  
伝え、明鏡止水の西湖の眺望も亦陶酔するばか  
りである。遮られ、地上の楽園と詠われた遠景  
も、もやに遮られて、筆致の詩文のような遠景

までも見渡せず、観賞の絶機を逸したことは、く  
やまれてならない。

其の四 靈隠寺

印社を辭して西冷橋を渡り、杭州飯店・岳廟の  
前通りを西進すること十分、靈隠寺に着いた。  
露天の信仰の深さを窺うことができない。又山に覆  
民衆の森厳の中に名刹の空気が漂い、如何にも由  
緒のある古寺らしい。  
となく山中には七二の洞窟があり、立派に保存されて  
いた。山中には七二の洞窟があり、立派に保存されて  
あつた。磨大師や、西遊記で有名な三蔵法師なども  
影を遺している。石仏を通じた洛陽の浮んでき  
たの像があつた。石仏を通じた洛陽の浮んでき  
たの像があつた。石仏を通じた洛陽の浮んでき  
ド石仏を包蔵する山を「飛來降」といつて、イン  
飛來降の砂が飛來して造られたといふ伝説がある。  
空が見える隙があり、近くに、明り窓のようにな  
いる。唐天竺に通じる意味がある。この飛來降の岩  
壁。全山を見学する時間はないが、この飛來降の岩  
十二世内には、元（十三世紀）までの摩崖の石仏

が三三〇余体も彫られていて、元代のものはラ  
マ教的仏像が多いという。（ラマ教はチベット  
仏教のこと）

二層の大きな山門楼が聳えて、其の大宇の一階上に  
圧力をかけられたようだ。其の大宇の一階上に  
「雲鷲飛來」と彫刻した巨額が輝映してあ  
り、この楼の奥に本殿の「雲林禅寺」がある。  
（清の第四代の康熙帝（在位一六六一一七二  
二）が、酒に酔つて「靈」を「雲」と書き間違  
えた）と云うことだ。時の皇帝の権力が絶対だつ  
た。この寺は東晋時代の三二六年、インドの僧  
慧理が開山したといふ。禅宗の古刹で、五代の僧  
越国時代に僧徒三〇〇〇人の擁したといふ。  
最初に書いた石塔も北宋の遺物であるといふ。  
現存する建物も十九世紀以降に再建された  
もの。十二世紀の作である。また大雄宝殿の正面  
の「彌勒菩薩」は日本の楠で作つたといふから、  
宋時代の（註）  
萬年後に世に出て、すべての生物・人間を

苦しみから救う菩薩である。菩薩とは仏に次ぐ位の尊号である。その彌勒菩薩の裏側に、一九・六米もある黄金の大釈迦仏が安置されてある。台座を含めると三六米というから、奈良の大仏様より少々小さいだけだ。不思議なことに此の釈迦仏が、ナマズの上鎮座しているから珍らしい。世界でも稀な存在だろう。

釈迦仏の両側には高僧の像が、後方には観音像が、下の方には十六羅漢像が、それぞれ守護神のようになり、ナマズと合わせて魚籃観音を想像させたのであつた。

今日まで東漢時代六八八年に建立した中国最初の仏教寺院「白馬寺」(洛陽)を始め、中原の地一帶の古刹から、雲南省・昆明にある無数の禅寺を参詣し、本日も亦、南宋の都・杭州を訪れて、仏教文化の粹を拜観できたことは、生涯の想い出となるだろう。身の幸福を感じた次第である。

### 其の五 花港飯店―六和塔

十一時三〇分、花港飯店に到着し昼食を終えて休息に入る。

社会主義国の外国人観光客に対するサービスは、資本主義国では考えられない程、最低の取扱いは、資本金の一向に改善されていぬ。

ソ連・東段諸国と同じく中国でも、観光は午前

九時から十一時半に終り(ホテル着時間)午後二時から十一時半に終り(ホテル着時間)午後二時からは徹命できない。しかし理由は簡単である。重労働の農民は昼休みの昼寝の為に、二時間半の時間が必要だと定めてある。これを基準にして、工場労働者も観光客相手の通訳や運転手も、総て其の原則を遵守しているのだ。結局、移動時間を含めて、午前午後ともに正味二時間半の観光しかできない。然し体制を批判しても始まらず、郷に入れば郷に従はねばならないから、誠に「没法子」処置なしだ。

予告通りバスは一路「六和塔」に向けて南進した。途中の道路工事の様相は、すべてが海戦術で機械力は全くない。その上、作業は至つて慢慢的(のんびり)だ。精を入れて働く意欲は見られず、時間の経過を待ち、賃金を頂戴するといふ無感だけが浸透して、現場監督があつて無いに等しく、監督も労働者だといふ意識の強さから資本主義の利点を取り入れられた中国社会の現状は、四年前の訪中時と余り進歩がないといふ印象が強く、四つの現代化をとらえ、本世紀末までに先進国の仲間入りを目指す目標は、遅々として進まずではなからうか。

日本人が働き過ぎるのか、彼等が休み過ぎるのか、世界の競走の殿である。情勢をよく認識し把握してほしいものである。



たとい。湖の中央にあるから、三方が緑の山に  
 囲まれる西湖の全景が、展望できる観景の最適地  
 だ。四つの小さな池が此の小島いつばいに拡がり  
 陸地はわずかに廻りを占めるだけで、仙人の幽  
 棲する浮遊の島のようにである。池にかけられた曲  
 折する九曲橋を渡ると、直ぐ北岸の船着場に達し  
 、島の幅は五〇米もあるだろうか。  
 島の南西にある湖中に立つている三個の石塔は  
 、北宋の詩人「蘇東坡」が建てたという。現在の  
 ものは明代のもので、中秋の名月には此の燈ろう  
 に薄紙を張り、その中に灯をともしらしい。  
 灯をともしずと月の影が湖面に映り、石塔からも  
 最大の鑑賞らしい。  
 西の彼方に眼をやると、東坡の造つた「蘇堤」  
 が、帯のように長く、ほんやりと浮んで見えてい  
 た。彼や白楽天が杭州の地方長官になつて西湖を  
 整備し、多くの詩を詠んだからこそ、此の美観が  
 大衆に愛され続けているのだらう。  
 利潤追求に没々する俗世界を離れて浩然の気を  
 養い、景勝を満喫して平和を悟り、再び乗船とな  
 つた。三潭印月が遠く離れて行くにつれて、東坡  
 の詩を思うと、離別の感傷が理解できるようだ。  
 中国人専用らしい「サンバン」と呼ばれる手漕  
 ぎの舟を追い越し、遠くの寶石山頂に立つている  
 保傲塔に向つて、遊覧船は北進を続けた。

孤山に連がる天の橋立のような白堤や、そ  
 の中央にある錦帯橋を右に眺めながら、西冷  
 印社の前を航行し、西湖の堪能も漸く終りと  
 なつたのである。

蘇東坡の詩の名節  
 「水光潋灩として晴れて方に好し、山色空  
 蒙として雨も亦好し。西湖を把つて西子（西  
 施）に比せんと欲すれば、淡粧濃抹総べて相  
 宜し」

西施  
 春秋時代に越王勾踐の臣「ハンレイ」は、  
 前四九四年、西施という美女を呉王夫差に獻  
 上した。そして夫差は西施を愛して妃とし、  
 政務を怠つた。臥薪嘗胆して時の到来を待  
 つた勾踐に滅ぼされた。これが有名な故事と  
 なつては揚貴妃らと共に、中国の四大美人に  
 数えられている。

其の七 未練 岳廟

を果すことができない最大の未練は「岳廟」の参観  
であつた。午後四時三十分に花港飯店に帰り、直ちに通訳  
に依頼してタクシ―を申し込んだが、親切に世話  
をする気のない通訳は、言を左右して、岳廟は五  
時閉門するからと聞き、閉門しても外観だけでも十分  
観に合ふと思ひ、若し閉門しても外観だけでも十分  
社会的な主義の社会では、自分の働く時間だけは義  
務的に時間を過ぎが、与えられた仕事以外の余計  
な世話は、しなないといふ事に徹底してゐる。車で  
一〇分足らずの距離であり、融通のきかないこと  
も甚しい。西の南寧市を訪れた時の通訳は、私等  
の申込みに応じて、門限の後に拘らさず、自らもタクシ  
に同乗して、目的を達した例がある。矢張り人間  
性に対しては、或程度の便宜を取りはかつてほしい  
ものだ。上は友好親善のラツパを吹いて、下は  
労働者意識が強く、動かず、というのが現在の姿  
である。

岳廟にまつられる人物は、南宋の名将で岳飛と

稱し、(一一〇三―一四一)異民族である金(満  
州族)と戦鬪を交えて百戦百勝、民族の英雄・共  
救国の勇将として漢民族に崇仰され、関羽と共  
に武廟にまつられてゐる人物である。関羽と共  
に彼の墓がここの地にある。それに代り稍々祥しく  
痛憤の至りだつたが、それに代り稍々祥しく歴  
史を記しておきたい。英雄たちの争奪の地と  
なつた黄河流域の最大都市・開封は、前宋の都  
であつた。後宋の都。杭州の親都市である。その  
開封の西方約二五キロの地に、朱仙鎮という中  
国三大鎮の一つといわれた町がある。南船北馬  
の接点の町で有名な所である。朱仙鎮の青春時代  
に碑が  
廻つた想ひ出の戦場の地は、私に青春岳飛の碑が  
建つていた。概況  
一、一五年、新興の女真族(満州族)は国号  
を「金」と称し、一二三年、燕京(北京)を  
陥して「遼」といふ国が滅亡した。  
の都・開封を陥落させた。宋の徽宗と欽宗の親  
子二帝は金の軍門に降り、虜囚となつて満州の  
吉林省に連れ去られた。(靖康の変という)  
徽宗の第九皇子で欽宗の弟になる「康王」は  
南京に逃れて「南宋」と称し、まもなく揚州に遷都。  
一代の「高宗」と称し、まもなく揚州に遷都。

(今までの宋を北宋といい、高宗は宋・第十代皇帝である)

を開始し、揚州(南京東方二〇〇キロ)に迫つた。高宗は「杭州」に逃げ、ここを都と定めて「臨安」と改称した。(一一二九)

たが、また越州(紹興)に帰り、一一三一年正月臨安に還つた。(以上は当時の概要)

あつたが、春秋左氏伝や孫呉の兵法を学び、高宗の軍のために一時は海上に追われた高宗が、漸く越州に帰つたころ、(一一三一)南京(時の建康)も敵の手中に落ちていたが、岳飛は勇戦して

あつて、ただ一人気を吐いていた。帝自らも「精忠岳飛」の四文字を大きく書いた真紅の大旗を授け、此の旗を真つ先に立てて、金軍を破つてくれ

と激励したという。金の大軍は四手に分れて南下し、

東の开封府、南京の応天府、西京の洛陽府は、

たちまち開城して金軍に降伏してしまつた。

迎撃した。岳飛は詔に「勇躍して河南に敵を

下の要隘

戦の南過

へと進撃

した。進撃

勢いた。進撃

は朱仙鎮

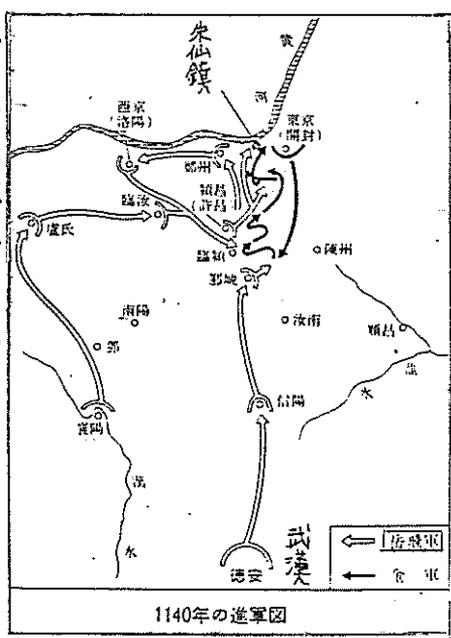
進められた

即ち開封まで

方この被害が

が遠くになると、帝を動かして、岳飛の召還を

「十年の力も、一朝にして破れた」と。それか



1140年の進軍図

和平派の秦桧は岳飛を罪におとす手段として、召還の詔を日に十二度も受け取りながら、命令に背いて朱仙鎮に留まろうとした事を責めた。その点を責め問われると、岳飛は地面をたたき、声をふり絞つて叫んだ。

「わしの一生の志は中原の回復にある。あのとき敵を追いつめ、宋の都であつた開封に二五キロまで（朱仙鎮）追つたのだ。もしも朝廷が、わしに三日の猶予を許してくれたなら、必ず首都をとりかえし、続いて敵を国内から一掃する事ができたろう。それを思うと、わしは死んでも死に切れない思ひだ」と。

主戦派を押えて講和に持ちこむためには、先ず大将の岳飛を投獄しなければならぬ。秦桧は彼を一一四一年十月、獄に投じた。そして同年十二月二十九日、一条の麻縄で殺したのである。享年三九才であつた。

（杭州岳廟にまつた岳飛の墓の前に、秦桧とその妻が、ひざまずいて像があるという。）

一一四一年四月、秦桧の進言により、宋と金との間に和議が成立し、国境を淮水としたのである。以降、南宋にも平和がおとずれ、首都の杭州（臨安）を中心に文化が栄えたのであつた。

正氣の歌を獄中で作つた文天祥（一二三八―一二八二）も南宋の忠臣である。彼は一二七六年正月、首都

の杭州が陥落した後も元軍に抵抗し、北京の土窟に幽閉されること三年、斬罪に処せられたことは有名だが、岳飛は武人として彼に優る功績を残した大忠臣であつた。

開封・朱仙鎮。杭州に愛着を感じ私としては、彼を賞賛したいばかりに、未練岳廟と題して加筆したのである。

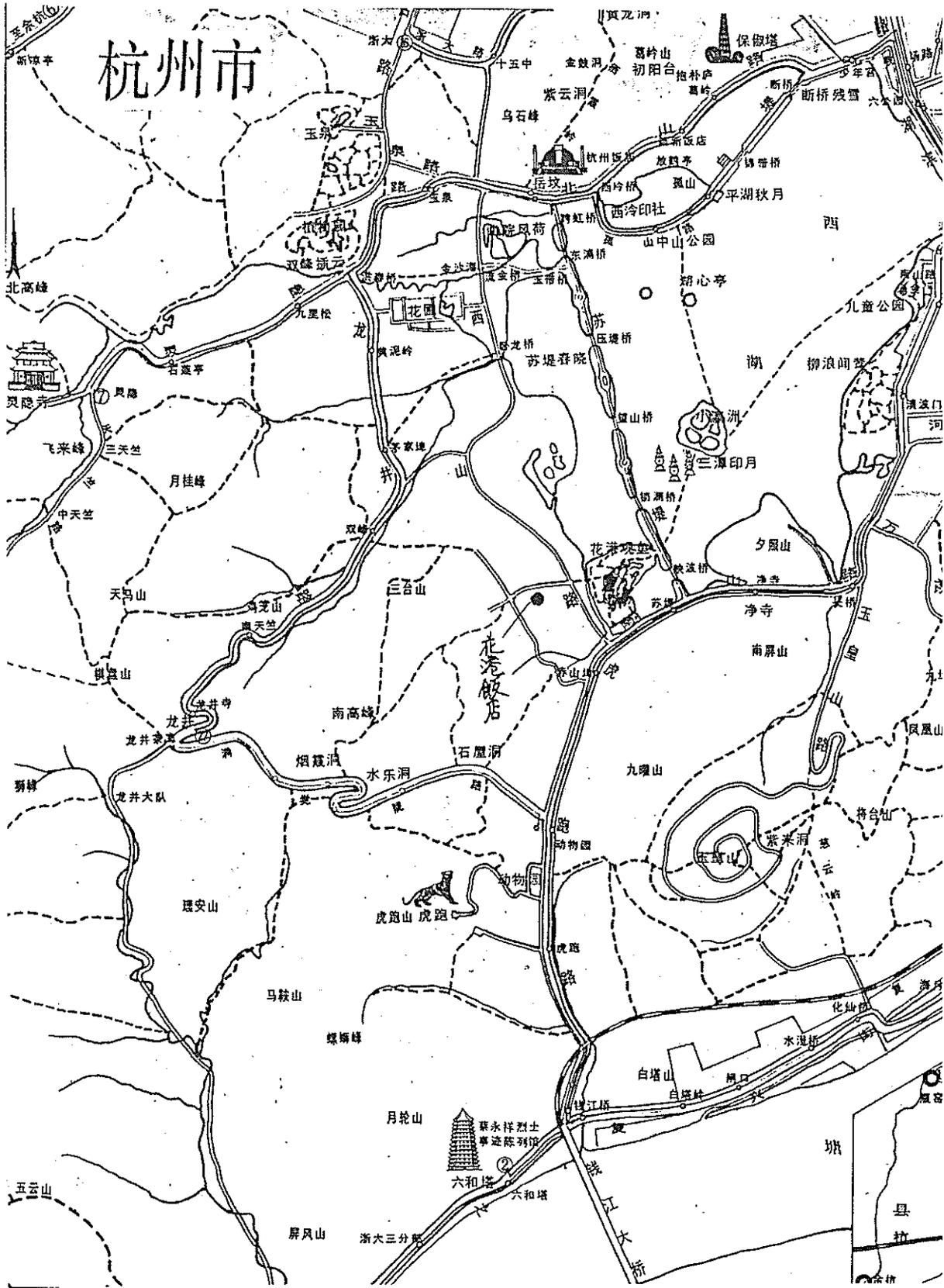
其の八 永平寺が梵鐘を寄贈

曹洞宗大本山。永平寺は、杭州市にある「道元」ゆかりの浄慈寺に、日中友好のシンボルともなる大梵鐘を寄贈する事になつた。鐘の重さは十トン、中国古来の様式に鑄造するたため、中国の常州で作られるが、製作費の三千万円は本年末までに寄付し、六一年春に中国屈指の大梵鐘が完成する。

浄慈寺は道元の本師である「如浄禅師」の眠る寺だが、近年荒廢が目立ち、永平寺の働きかけで寺全体の大復興工事が進められてい

梵鐘の寄贈は永平寺が中国側の同寺再建に感謝する意味で、広く寄付を募り寄贈するものである。誠に喜ばしいことだ。寄贈するもので十トン級の梵鐘の完成が待たれるという。

# 杭州市





中国国際旅行社蘇州支社の「孫來慶」氏の案内  
 をうけ、バスに乗り移つて觀光に發つた。氏の  
 街並は西安・洛陽・開封城内などの古都のよう  
 に、狭い道路が整然として走り、どの屋根  
 瓦は黙然と歴史を誇つてゐる。又何処の古  
 都にもあるプラタナスの街路樹は、我が顔に  
 大目も育ち、冬は風防け、夏は陽けと、一石二鳥  
 の役目を果してゐる感じである。縁組をしてから  
 蘇州は我が金沢市と姉妹都市の縁組をしてから  
 四年目を迎へ、順調に發展してゐると通訳は説明  
 していたが、永い歴史のある古都は古くはないと  
 使命があり、それ程まで發展してほしくないとい  
 云、いたいのであつた。即ち再び文化大革命のよう  
 な、荒殘なことから守る事を第一に考へて欲しい  
 のである。蘇州は金沢市の他に、日本の池田市、水の都イ  
 タリアのベニス、オーストラリアのピクトリア市  
 と姉妹都市の締結をしてゐると、通訳は補足説  
 明をしてゐた。

其の三 獅子林

元代至生二年（一三四二）蘇州の僧「天如禪師」  
 が、師の「中峰和尚」の為に建てた禪寺が、こ  
 の獅子林である。

元末の「倪瓚」は造園技術にすぐれ、僧の「  
 天如」は獅子林の庭を造るとき、わざわざ彼の「  
 意見」を求め、つて来たことを訪れてゐる。詩人  
 でもあつた倪瓚は、晩年ここを訪れたらしく、蘇州  
 や画を作つたから有名になつたらしい。蘇州  
 四大庭園の一つに数えられてゐる。その後獅子林と  
 改称し、明朝末期に庭園にしたものである。清  
 の乾隆十二年（一七四七）に画禅寺と称し、倪  
 瓚が造つた築山の形が、獅子に似てゐることか  
 ら、石獅子林の名が付けられたといふ。奇石が  
 、石降林の如しと形容するようになつてゐる。怪石が  
 が、一つ一つの石に獅子の形が、吐月・玄玉等の名を  
 た、池が造られて、百年の古樹が、其れに加わり、池  
 の中心にある湖心亭を背景にし、美観は、至上  
 の一景である。また文天祥碑亭も印象に残つ  
 た。特に他に類がないと思ふ獅子林の特徴は、こ  
 れらの岩石の下に石洞があつて、曲折した幽深は  
 は上左下に連結されて、曲折した幽深は  
 感を迷わす表現しなればならない。桃源  
 境（世間を離れた別世界・仙境）に身を置いた心

る景観の一つである。

#### 其の四 拙政園

獅子林のすぐ北側に拙政園があり、蘇州は案内の通り庭園の街である。明朝に仕えて隠退した役人の「王猷臣」が造つた庭園で、造り始めたのは明朝第十一代正徳年間一五〇六年から一五二二年までの日時を費したといふ。拙政園は「江南の名園の冠」と云われているばかりか、清の頤和園（北京）・旧満州熱河省の都である承德の避暑山荘熱河離宮と共に、中国の三大庭園として名高い。勿論蘇州四大名園の一つで、浮世を離れて風流談議をした「清談」の姿がしのばれてくる。庭園の六割が池で造られ、その中に点在する白壁の亭や、朱塗りの楼閣、至るところに美しい眺である。水の太湖石が、水面に映つて誠に美しい眺である。水の都らしい水と石と楼閣の庭園は、日本では真似の出来ないことだろう。無粋な私でさえも、ゆつくりと時間を取り、数日間滞在して観をとりたい心境になつた程である。拙政園内は東園・中園・西園に分れて中園が最も大きく、我々は先ず東園から入園した。此処は明代の旧址があつた所で、一九五五年に改築され

て、今では休憩場もできていた。中園には波形廊といわれる水廊（片側が湖水に面し、反対側が白壁の長い廊下になつている回廊）が続き、各所に曲橋がかかつて景観に美を加えている。明代の名画家・倪元路の「山花野鳥之間」という題額が掲げられて、「雪香雲蔚」は、池の中央にあつて、園内が一望できる最高の観景の場所である。中園から「小飛虹」と呼ばれる渡り廊下を通り過ぎると、西園に出た。鴛鴦館と書いた館があるから、暖い季節になると「おしどり」の泳ぐ姿が見られるのだろう。続いて拙政園の一隅に建つてある内されて、湯茶の接待をうけながら盆栽を観賞し、安静優雅の中の休息に疲れをいやしたのであつた。変幻万化の園内は総てが水石盆景のようで、感歎の余り後髪を引かれ、去り難いという感じをいだいたのである。蘇州の観光が終り、盆栽園が設けてある十階建の蘇州飯店へと、車は急いだのであつた。

蘇州飯店の大広間で催された金沢・蘇州両市の友好を深める晩餐会は、今次訪中の圧巻である。広間正面の掲額には、水ぎわ立つた超風な紫の藤の花が描かれ、題して「紫帳春暖」と雄渾な筆致で書かれていた。春となつて温暖な季節になると、一面に藤の花が咲きみだれ、恰も紫のまん幕を張りめぐらす、という景観を詠んだものだろう。各円卓上には眼を引くような美しい花が飾られて、コップの中には入れた純白のナフキンは、趣向をこらした動物の形でかたどられ、文化の粋を尽した高尚な歓迎準備であつた。満場の拍手の中に蘇州市の代表各位を迎え、彼等も亦拍手で応え、青眼を開いたほほえましい場景であつた。石川県造園緑化建設協会代表は、衆目注視の中で先ず江川金沢市長のメッセーシを朗読し、引き続き微笑を浮べた記念品の相互贈呈に移つた。市の代表は歓迎の挨拶から親善の言葉を述べ、蘇州の蘇州市の近況を紹介するなど、和氣あいあいの中に杯をあげての乾杯となつた。和氣あいあいの食前に方丈の珍味が次から次へと運ばれ、所せましと盛り立てて行く卓を囲み、杯を傾けて酒を酌

み交わし、宴酣<sup>ばんたん</sup>となつた。時に詩吟あり、流行歌ありという盛況が満堂を圧して、笑声は絶え間もなく、満悦この上なしの宴が続いたのである。初めて口にした鳩の卵を始め、酒池肉林の旨甘を味わう深交は金石の交りで、両市の友好に錦上添花を添えたことだろう。有限な肉体と精神を持つ人間は、限られた世界の中に生きる運命におかれ、定つた時との出会いがある。不幸にも青年期を中国の戦場で過した経験のある私にとつては、今日の出合いは終生の感激であつて、生涯忘却することはないだろう。卓を同じくした中国国際旅行社蘇州支社の日本科副科長（名刺のとおり）の「朱長海」氏と名刺を交換して懇話を楽しんだ。その折、北京の国際旅行総社（本社）の劉桂香氏と私は、長い間の親交があると伝えると、彼も親交がある間柄だと返答し、友人を通じて又友人を得た喜びは、感銘深いものであつた。又友人を得た喜も忘れ、万感の想いが溢れる中に閉会が告げられた。相互に別れ難い心情をおさえて立ち上り、うちに最大行事の幕が、とじたのであつた。





寒山寺の門前には小さな運河が流れ、江村橋といふ大鼓橋の下を小舟が通り、観光客相手の店舗も並んで、のどかな田舎である。詩の詠まれた当時は商業の中心地で、昼夜を通して船が往来していたという。

寺は黄い塀で囲まれて、寺にしては珍しい色彩だ。山門をくぐると直ぐ「楓橋夜泊」の詩碑が清の「俞樾」の手で書かれていた。記念のために石刷りを一部求めた。

寺の規模の小さいことに驚いた。全く名声とは正反對である。往時の隆盛時には僧三〇〇〇人と云われ、七三三三冊の教典があつたも伝えられていた。大伽藍だつたのである。

現在の殿宇は清朝末期に再建されたもので、十回目の建て替えらしい。建て替える度に小さくなつて現在の姿になつたそう。

最も大きな被害をうけたのは、清朝末期に起きた太平天国の乱による焼失である。キリスト教を信奉する太平天国軍の槍玉にあげられたのも、当然かも知れない。一八五三年三月、天京（南京）を占領して国号を太平天国とした彼等は、此の辺から上海にまでも戦火に巻き込んだのであつた。

詩碑のある建物の右奥に、黄い壁の二層の楼がある。これが彼の有名な鐘堂で、小さいばかりでなく、二階に上つた。日本のどここの末寺のものより小

さいだろう。

一行の人達は願いを込めて鐘をつこうとしたもの、回廊は人波に押され通して足の踏み場もない有様だ。安心をして鐘をつけなかつた事の方が、印象に残つたことだらう。諸行無常のこの世に、平和の鐘を打ち鳴らしたいと祈願していた私の願ひも、当然踏みじられてしまつた。

続いて寒山和尚と拾得和尚の立像を拜観し、五百羅漢（宋代のもの）に詣でて庭園に出た。この庭園に京都府綾部市から文化交流として贈られた梅の木が、植樹されてあつたが、一体植樹の場所は誰が決めるのであろうか。

尚、日本から寄贈された鐘と財錢箱は、多分本堂の右側の仏像の前に据えてあつたものらしい。

期待に反したような寒山寺の参観は暫くの間、終りに再び門前の江村橋を眺めてバスを待つたのであつた。

其の八 留園

寒山寺と蘇州火車站（駅）の中間に、蘇州四大名園の一つである留園がある。これが最後の観光となつた。

明代嘉清年間の一五二五年、官僚であつた「

除時泰「氏の私有花園として造られたのが始まりである。最初は東園と呼んだという。「劉蓉清朝嘉慶年間（一七九六—一八一九）に「劉蓉清朝光緒年間（一八七五—一九〇八）に「帰盛閣等が増築された。次々と拡張して多くの樓園に改名して今日に至っている。劉：劉。分が中戦争の時に不幸にして遭遇し大部。その点は日本人として低頭して懺悔しなければならぬ。理由の如何を問わず戦争に訴えてはならぬ。留園は中・東・西・北の四つの庭園から構成されている。中園は太湖石で囲まれた湖を中心にして、湖面に倒影される景観は賛辞の言葉も知らず、橋上の藤の開花は絶景だろうと想像した。楼閣や回廊の建築を主体にした東園、自然の風景の西園、田園風光の北園と駆け歩で一巡した。この四つの園は色々な名園の長所を集めたもので、計算された庭園造りが特徴のようであった。山水画のような名勝の数々に眼の保養を満喫して、出発の合図となつてしまつたが、蘇州の名園

を觀賞し、何処が何処だつたか、記憶をだることも苦勞であつた。特に造園に全くの素人である私には、尚更の感じが持たれ、暇を求めてメモをとつたのである。

第四章 上海

一月十一日午後、越の都の杭州、呉の都の蘇州に足跡を残し、魅せられた歎喜は、胸奥に浸透したほどであつた。特に呉・越の景観は中国各地の中で、星群の中間に満月が輝く。形容のうちに、抜群である。賛辞を贈りたい。容のうちに、抜群である。また温故知新というか、数多くの古い歴史を感懐いたものである。幸福の泉にしたつた。逢うは別れの始めという通り、名残りを惜しんで蘇州を去り、午後二時に上海に帰着した。其の一 黄浦公園—南京東路

観光する時間は少く、あなた任せの一行は、案内される所は何処かと車窓を眺めるうちに、バスは呉淞江沿いを走り、外白渡橋（ガーデンブリッジ）を渡つて黄浦公園に止つた。二十分の小休止だ。



に一巡したが、詳しい説明も少く、みち順さえも判らない参観であつた。入門して先ず目にとまつたのは、一對の鉄獅子である。元代のものという。日中戦争時には行方不明になつたが、戦後に復歸した事は喜ばしい。三穗は稲のことで、豊作を祈願する所であつて大額が掲げてある。(清朝一七六〇年のもの)

浙江省産の武康黄石で造つた大築山が園の中心らしく、その門を通り過ぎると、塀の上に据えられた龍頭が、大空を通り過ぎてくつきりと見上げられた。龍の胴体は波状して塀の上を一周し、上下にも蛇行して鱗は総て瓦で出来ている。初めて拝見した豪華な造りに圧倒され、甬を脱いだ感じを受けたのであつた。

人波におされて更に進むと、今度は相對して据えられた双つの龍頭が、塀の上に置かれていた。塀の全周に九個の龍頭があり、これを九獅軒と呼んでゐる。(一九五九年作)

古代から中国では、龍は天子を表徴して、天子しか使用できなかつたものである。清朝滅亡後は天子は居らないが、此の公園の塀にまで龍が使用されるのは、北京の故宮(紫金城)の龍は何と見られるか。

次の点春堂は宋代の詩人・蘇東坡の詠んだ詩の「翠点春麗」の句から引用したもので、春は青々

として麗しいと云う意味である。点春堂は又、清朝末期に降起した大平天国軍に呼応し、一八五三年に上海で旗上げをした「小刀会」が、この堂を司令所として滅清運動をした事でも有名だ。

余りにも広大すぎる「予園」の参観は、迷路の見学という印象が強く残つたが、一九五三年に一般に公開され、今回慌しい時間を利用して見学が出来たことは、誠に幸いの一語に尽きるだろう。

予園を去つて、南京東路の人民公園前にバスは止つた。三十分のショッピング時間が与えられたが、見るべき所も買う物もない。漸く手持ち無沙汰の時間が過ぎ、上海賓館に辿り着いて今次の訪中に終止符をうつたのである。

管子に「一年の計は穀を樹うるに如くはなし」「十年の計は木を樹うるに如くはなし」という事が書かれている。十年の計を本業とされ、社会に貢献される石川県造園緑化建設協会諸賢各位の、益々の御発展を祈り、紀行文の終りとしたい。

其の一 「權威こそ創造と發展を

封じ込める亡靈」

「心焉に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞えず、食らへども其の味を知らず」。何事も其の氣になつて、心を入れてやらなければ、正しい判断も行動も出来るものではない、といふ意味で、四書の一つである「大学」に書いてある文句である。門外漢の私に、呉・越の国の由緒ある庭園を、幸いに観覧することが叶えられたが、其の造園文に就いては大学の一節にある通り、その氣になり心を入れて観察する能力や経験もなく、云々する資格はない。しかし中国各地を見聞した素人の感想としては、北京の頤和園に優るものはないと思う。未だ此處を訪門してはいない協会の方々は、是非とも参観される事をすすめたい。三百年余りの清朝の終幕に君臨したのは、皇帝でも宰相でもなく、「西太后」であつた。皇太后（東太后）に子がなかつた為、皇太后（西太后）に子がなかつた為、第十代の皇帝の位に就いた。（同治帝）ここで西太后が政治の実権を握つたのである。

同治帝は病にたおれて一年あまりで急死したが、彼にも子供がなかつた。同じく咸豐帝の妃の子を皇帝にすえて政権を維持したのである。第十一代の皇帝となつた光緒帝も三十八才で死亡し、清朝最後の皇帝となつたのが宣統帝である。（三才で即位、後日滿州皇帝となる）西太后は、自分の隠居（実権を握つたまま）の場所として頤和園をつくつた。中国海軍をつくる膨大な軍事費までも、総て此の園につき込んだ。この結果、清仏戦争にも日清戦争にも破れて、その後、孫文等の降起。八ヶ国連合軍の北京入城等の事変を経て、清朝は亡んで行つたのであつた。艦隊をつくる費用で造つた頤和園は、総費用から規模に至るまで、世界に類を見ない大庭園である。余談だが、膨大な税を尽したことを説明するため、歴史の概要を附記した。この事から、次のような教訓的な言葉が生まれ、私に判断している。即ち「權威こそ創造と發展を封じ込める亡靈」。この言葉は、周恩来が述べたと記憶しているが、現在の社会



主義中国も、前者の轍をふまないようにと願つて  
いる一人である。前者の轍をふまないようにと願つて  
い、禍いのやつて来る門と、福の入つて来る門は同  
じで、利と害は遠く離れて、これに思ふが、両  
者は常に隣りあつて、これに思ふが、漢の高  
祖の孫・淮南の書いた書に述べている。  
は、権力におぼれ、自己の保身にのみ走り易いこと  
どうか、国民を雄弁な口の技術におぼれさせないよ  
うにと、淮南子の人生訓を例にとつて、これから  
も注目して眺めて行きたい。

## 其の二 民衆生活

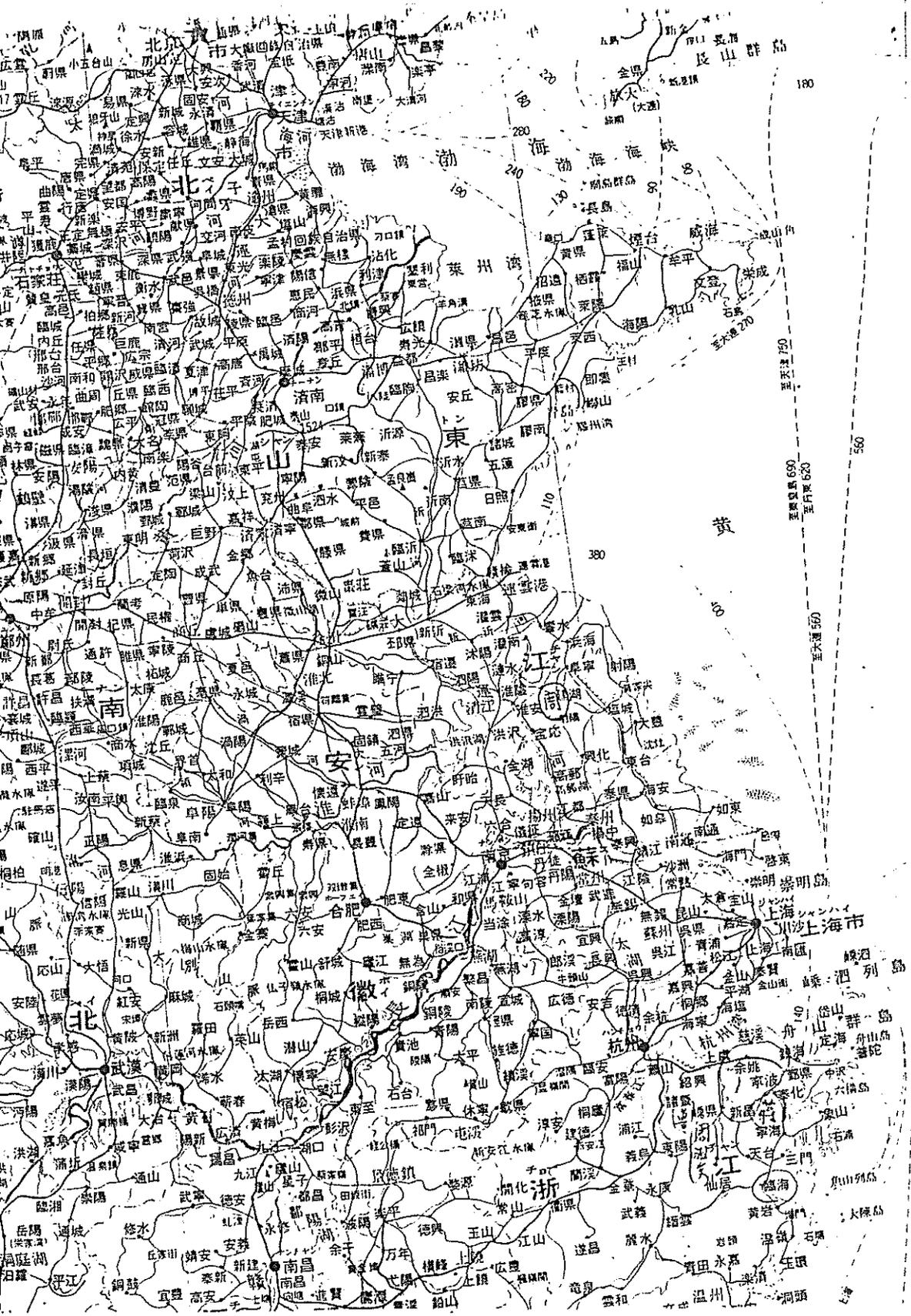
前回の訪中は四年前の昭和五六年四月で、華国  
降が辞表を提出した政変の最中であつた。経済運  
営の総失敗の責任を彼にとらせ、表向き  
の原因であつた。責任を彼にとらせ、表向き  
は、弾丸よりも凄惨を極めたのである。このよう  
な政権争奪戦のために国民は、インフレ・失業・  
財政赤字の三重苦に悩まされて、インフレ・失業・  
も、今回の訪中では、一般諸民の生活をのぞく機会  
もなく、四年前と比較する事は軽々には出来ない  
ことだ。四年前と比較する事は軽々には出来ない  
であつた。前回は感じたことは、両替のレート急変

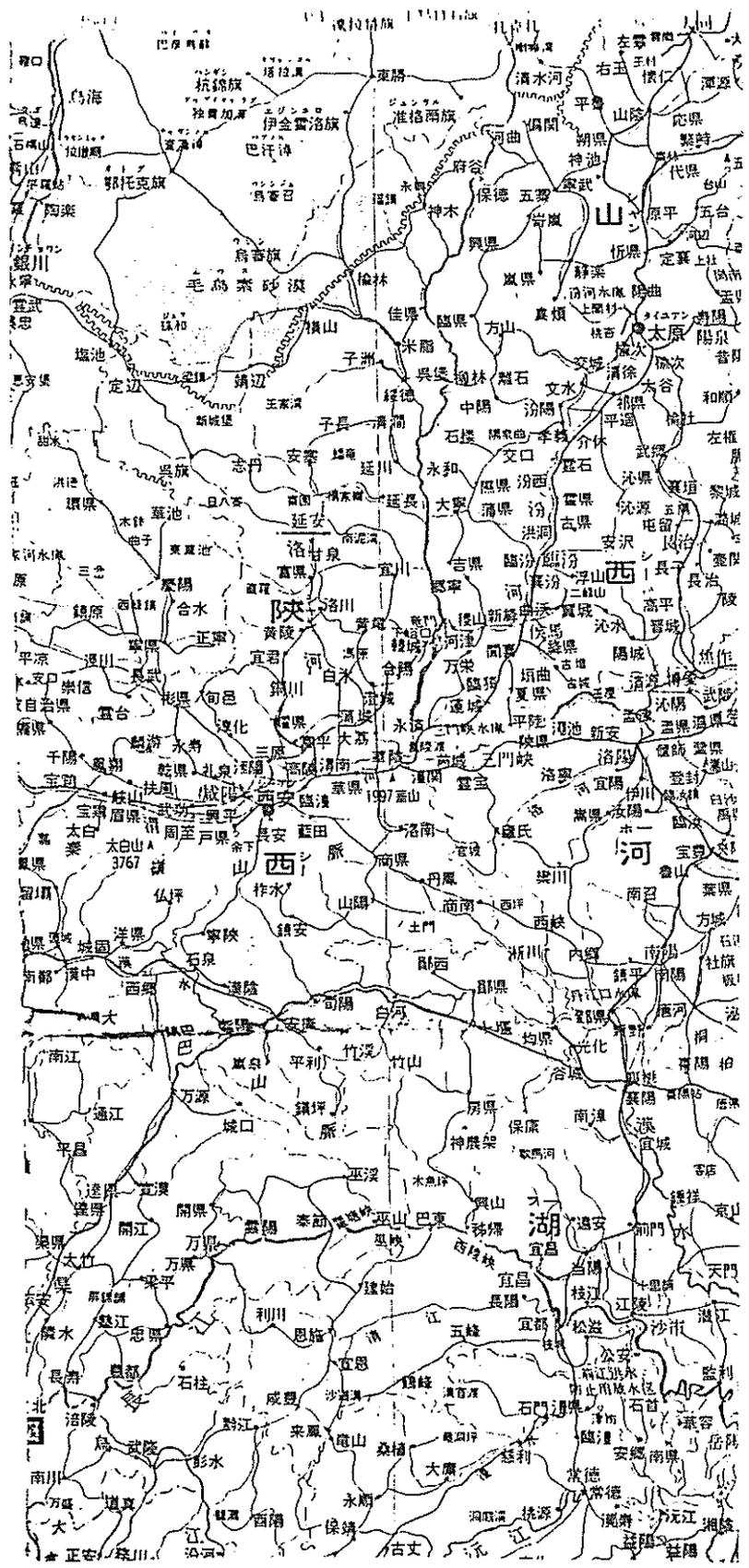
ており、今回は一回が一元が一元〇〇円であつた。四割  
以上も円が高くなつた点を考へると、中国経済の全  
はどうか、私には勿論、論評する資格はない。前  
く、知らない私には勿論、論評する資格はない。前  
黒テレビが一〇〇元と通訳は説明して、八インチの白  
回は十二インチの白黒が五〇〇元のこと、前  
と、この面では進歩したのである。しかし諸  
民にとつては手の届く品ではない。四年前の生  
活程度と見ると、服装等から判断して、四年前の生  
活程度と見ると、服装等から判断して、四年前の生  
会地ですえ此の状態である。四年前の生  
更に百貨店等に売られて、ニューメデア時代を迎へた  
旧態依然であつて、ニューメデア時代を迎へた  
我國の大飛躍とくらべ、益々格差が開く感じを  
持たされたのである。益々格差が開く感じを  
農家の人が巨万の富を得て、海外までも旅行  
をしたと通訳は盛んに宣伝して、海外までも旅行  
を程の人達で、全般農家に通用するものでは  
ない。自己の長所や一部の成功或は発展を、白髪三  
千丈式に誇大宣伝することは、社会主義国の通  
例で、外国の長所を伝えず短所を国内に宣伝す  
る事も常用する手段である。日本人の収入を云  
わすに、家賃や食費の高いことだけを指摘して  
いるのである。



最も驚異の眼を引き付けたのは、第二次国共合作時に撮影した毛沢東と蒋介石の写真を、大きく報道していることであつた。次いで一九三六年の西安事件の主謀者だつた張学良の写真も掲げてあつた。過去の宿敵だつた頭目の写真や文書をのせた事は、過去の過去として扱つてゐるからだ。それだけ政治的に安定した証拠かも知れない。四年前の訪中の際には考えられない事である。対台湾政策の一端とも考えられることだ。前回の当時は、批林批孔の勢いが未だ残つてゐた時期だけに、古代の中国史を始め、孔子や孟子の儒教思想は敵視されてゐた。それが此の本には孔子生誕二五三五年記念として、孔子第七十七代の嫡孫の「孔徳威」氏の写真をかかげ、孔子の遺徳をたたえる文書が、記述されてゐた。その他「曲阜」(孔子生誕の地で済南の南方)の記念活動も詳しく伝え、儒教思想の復活を訴えるような感じさえ、覚えたのであつた。宗教は搾取機関の一種であり、過去はすべて悪とした往時とは、今昔の感がしたのである。宰相(春秋時代の政治家で齊の桓公の宰相)の成語故事を記載して、解釈を加えてあつた。封建制度時代の皇帝に臣従する彼等の言葉を取り上げる程、学問の自由化が進んでゐるのだから。それとも政治的に利用する魂胆だろうか。

富国強兵策を實踐して成功した管仲の遺言を、現代に適用させる裏面の大目的は、我々が軽々に判断はできない。日本でも全学連の委員長をした人物が、今では中曽根首相の有力なブレーンとして活躍してゐる。マルクス主義は絶対に正しく、転向は悪だという独善的な考えを捨てた姿は、日本の自由を投影してゐるのだ。この観点から見ると、遅々と思うが中国も自覚して来たような動きがあり、両手を挙げて歓迎したい。「一利を興すは一害を除くにしかず」。これは「元」の宰相「ヤリツツザイ」の述べた言葉である。宋と金とが激しい戦いをしてゐる間に、北方の蒙古が台頭してきて、中国全土ばかりではなく、世界も制覇したのであつた。この成功は常に民衆の事を念頭に置いて、政治を行つた名宰相の彼の信念からである。他の諸朝臣たちが「そんな事では税が軽過ぎても出来ない」と攻撃した時に、返答した名文句である。「改むるに憚ること勿れ」の論文の教えと共に、二つの格言を復習して、今次訪中の雑感の終りとしたい。





昭和六十年一月

寺前信次